



川内原発ゲート前で拳を突き上げ抗議する人たち。「川内2号を再稼働するな！」の声を響いた。

川内原発再稼働阻止へ、市民らが師走の緊急行動 テロ対策名目の「特重」許すな

「原発ゼロが一番安心！ 川内原発2号機を再稼働するな！」

九州電力川内原子力発電所（鹿児島県）のゲート前で昨年12月22日朝、抗議の声を響いた。同日19時半に川内原発2号機が再起動されるとの報道を受け、原発に反対する市民団体らの呼びかけで有志約30名が緊急集結。「福島を忘れるな」「ストップ！20年延長」の横断幕などを掲げながら再稼働を糾弾し、廃炉を求めた。その場で要請書（ストップ川内原発！3・11鹿児島実行委員会）など替同県内93団体を呼び上げたが、九州電



要請書を読み上げる参加者の川畑清明さん(左)。右隣は実行委員会事務局長の杉原洋さん。

力からはコロナ禍を理由に受け取りを拒否されたため、ただちにFAXで送信した。

川内原発は国の新規規制基準が定めた特定重大事故等対処施設（特重）工事が期限内に間に合わなかったため1号機は昨年3月に、2号機は同5月にそれぞれ運転停止となった。しかし原子力規制委員会（規制委）は11月に再起動された1号機に続き、2号機についても12月17日、特重工事を合格とした。だがテロ対策とされる特重はほとんど非公開。電力会社や規制委は「安全になった」とするが市民もメディアも確認ができず、問題が隠されていても分からないのだ。前記実行委員会事務局長の杉原洋さんは「欧州では常識的である

原子炉格納容器の二重化や、溶け落ちた核燃料を回収するコアキャッチャーは未設置。安全になったとはインチキだ」と指摘。同共同代表の向原祥隆さんは、関西電力大飯原発（福井県）3号機と4号機の「設置許可をした規制委の判断は誤り」とした大阪地裁の判例を挙げ、「同じ規制委が判断した川内原発も危ない。止める！と言っているも同じだ。20年延長どころか今も危ない」と訴えた。

無意味な工事に2420億円

川内原発前に広がる久見崎海岸で2014年に「脱原発川内テント」を設置し、薩摩川内市で「蓬菜塾」を開きながら脱原発運動を支援している江田忠雄さん、野村昌平さんを訪ねた。

同年まで東京の経産省前テント



「原発は今あるだけで危険だ」と訴える実行委員会共同代表の向原祥隆さん。



未来ある子らに遺すな核のゴミ 原発廃炉は 天の声

川内原発前の久見崎海岸に立つ「脱原発川内テント」。(このページの写真はすべて撮影・薄井崇友)

ひろばでも活動した江田さんは、「特重はテロ対策にはならない」と述べつつ「原子炉は炉だけではいい。炉から配管などがたくさん出ている。飛行機に激突された場合、仮に原子炉が無事でも建屋や配管が減茶苦茶になれば放射能は出てしまう」と指摘。野村さんは「産卵に帰っていた赤海亀が、再稼働で温排水が再び流されて以降は年々減り、今年（20年）は1頭も来なかった」と訴えた。

2人とも「老朽原発の20年延長は近隣住民も懸念している。全国的に延長反対・廃炉の声を集めることだ」と述べた。テロ対策にならない特重を運転延長の布石にさせてはならない。九州電力は運転期限まで4年ほどの川内原発の特重に2420億円を投じている。

薄井崇友・フォトジャーナリスト